平成 16 年 3 月 11 日（木）午後、参議院予算委員会において、大江康弘議員（民主党・新緑風会、51 歳、和歌山県出身、比例選出・当選 1 回）が 30 分に渡り、台湾関連の質疑を行った。答弁に立ったのは、川口順子外務大臣および藪中三十二・外務省アジア大洋州局長の 2 人。

大江議員は、2 月 28 日には台湾で行われた「手護台湾（人間の鎖）」に中津川博郷議員と共に参加し、李登輝前総統や呂秀蓮副総統らとも会見した。

訪台直前には、中国大使館の公使および参事官の 3 名が民主党・国際部に乗り込み、「国会議員の訪台は日本の為にならない」と脅迫同然の抗議を行い、また各議員の事務所にも中国大使館から直接電話が入り、結局 6 名の議員が訪台を取りやめたとの報道が台湾『自由時報』でなされたが、その脅迫にもめげず、大江議員および中津川議員は台湾の土を踏み、日本の矜持を示した。ちなみに民主党は依然として中国の内政干渉について発表も抗議もしていない。

質疑中、時には声を荒げて日本政府の台湾に対する"不義理"を追求する姿に、我が日本国の台湾に対する冷淡な態度に業を煮やしていた心ある日本人は溜飲の下がる思いであった。大江議員への激励をお願いしたい。

なお、口頭での質疑のため、分かりにくい箇所には適宜注釈を（　）で挿入していることをご留意いただきたい。以下、質疑全文である。（筆記＝日本李登輝友の会青年部部長・早川友久）

大江康弘議員（以下、大江と略す）
「今日、私がご質問申し上げる幾つかのことは、もう既に衆議院の予算委員会でも、私どもの同僚であります中津川先生、そして長島昭久先生が川口大臣に、また外務省にお尋ねをさせていただいておると思うんですけれども、私はやはり、今、台湾で 3 回目の（直接）総統選挙が行われております。極めて民主的な方法でトップリーダーが選ばれる選挙をやっておるわけであります。そういう中で、私は 28 年間、台湾との信頼を築き上げてきた一人として、参議院のどこかの場面で議事録に残しておかなければ、やはり台湾に対して今まで築き上げてきた信頼や信義というものに応えることが出来ない。そんな想いで、今日は質問に立たせていただいたわけであります。

まぁ、川口大臣の衆議院での答弁を見ておったら、少し木で鼻をくくったような答弁もあ

ります。私は実は、川口大臣のファンであるんです。

（委員席から笑い）

いや、実は川口大臣のファンであったんですね。実は今日、川口大臣に質問をすると言ったら、ある先生に「余り無理なことを聞くな」ということを言われました。川口大臣に質問する前に、私に了解を取れ、と。実は、我が党の広野允士（ひろのただし）先生。通産省の時の同僚ということでありまして、色々と大臣のことをお聞きして、それからファンになったんですけれども。
しかし、いささか最近はカタカナの"ファン"から漢字の"不安"になってきましてですね（委員席から笑い）、これで大臣がいいのかな、日本の外交というのは本当にいいのかなと、不安に駆られておる１人であります。

まぁ、余計なことはさておきまして、片道の質問というのは初めてでありまして、自分ばっかりしゃべっておっては答弁が聞けません。

えー、実は台湾のことに関して幾つか質問をさせていただきたいと思いますけれども、その前に事実関係をさせていただきたいと思います。

台湾とはご存知のように 1972 年の日中共同声明以来、我が国は基本的には国交を断絶してまいりました。その間、台湾と日本の窓口をしてきたのは、日本側では交流協会。まず、この交流協会というのは、そもそもどういうことを目的に設立をされたのか、これを確認しておきたいと思いますのでよろしくお願いします。」

藪中三十二・外務省アジア大洋州局長（以下、藪中と略す）
「お答え申し上げます。交流協会についてのご質問でございますが、1972 年の日中国交正常化以降、我が国と台湾との間の関係は"非政府間の実務関係"として維持されてきております。この財団法人交流協会は、かかる日台間の交流を円滑にするために設立された財団法人でございます。この交流協会は、日台間の交流を円滑に維持する為に、例えば、台湾在住邦人への各種便宜供与であるとか、あるいは、海外子女教育・文化交流・貿易経済関係等の様々な事業を行ってきている協会でございます。」

大江
「もう一点、聞きます。この交流協会の運営資金というのはどうなっていますか？」

藪中

「交流協会の予算財源の相当部分は、外務省・経済産業省および文部科学省等の政府補助金等によってまかなわれておりますが、その一部は一般企業からの維持会費収入にも依存しております。」

大江
「外務省の負担分ではどの位になっておりますか？」

藪中
「15 年度の予算額でございますが、外務省からは 19 億 3742 万 3000 円となっております。」

大江
「これ、平成 15 年度の収支予算というのは約 30 億円なんですね。今、答弁がありましたように、19 億が外務省からいっておる。あと、文部科学省から約 6 億 5000 万。まぁ、財団法人とは言っても、ほとんどこれはいわゆる"政府出資の"団体であると思うんですけれども。

そこで、この交流協会の台湾の所長、これは今、どなたですか？」

藪中
「内田所長であります。」

大江
「この内田所長が 12 月 29 日に、台湾の総統府いわゆる日本でいう総理官邸に行ったというのは事実ですか？」

藪中
「事実でございます。」

大江
「何をしに行かれたんですか？」

藪中
「昨年の 12 月 29 日、交流協会・内田所長が台湾総統府に参りましたのは、わが国として現在の台湾を巡る問題について、当然のことながら、当事者間の話し合いを通じて平和的に解決されることを希望しておりますけれども、現在の状況（陳総統が公民投票実施を決定したり、当選後に新憲法制定を明言したこと）ということで、この地域の平和と安定の

観点から、日本政府としての考え方を伝達したわけでございます。」

大江
「誰に会われました？」

藪中
「邱義仁・総統府秘書長であります。」

大江
「私も 2 週間前にお会いしました。そして、呂副総統にもお会いしました。李登輝前総統にも 2 週間前にお会いして来ました。この内田さんが、というよりも、交流協会が総統府に直接出向くということは（今までに）あったんですか？」

藪中
「総統府に参りますのは、色々の連絡事項でございます。」

大江
「色んな連絡事項というのは、今回も色んな連絡事項の一環として行かれたわけですね？」

藪中
「今回は、その一環としてわが方の立場を述べに行ったわけでございます。」

大江
「わが方の立場を述べに行ったということは、この邱秘書長いわゆる日本でいう官房長官が受け取ったという、日本から手渡されたであろう申し入れ書（を渡す為に行った）ということだと思うんですけれども。その申し入れ書の内容をちょっと教えていただけませんか？」

藪中
「申し入れの内容でございますが、"台湾に関するわが国政府の立場は、日中共同声明にある通りである。そこで、わが国としては、台湾を巡る問題が、当事者間の話し合いを通じて平和的に解決されること、そのための対話が早期に再開されることを強く期待している。しかし、最近の陳総統による公民投票の実施や新憲法制定等の発言は、中台間を徒に緊張させる結果となっており、わが国としては、台湾海峡およびこの地域の平和と安定の観点から憂慮している。わが国としては、現在の状況が今後、さらに悪化することは回避する必要があると考えており、陳総統が就任演説で行った『4 つのノー、１つの無い』を遵守さ

れ、この地域の平和と安定の為、慎重に対処して頂くことを希望する"。この主旨を申し入れたわけでございます。」

大江
「私がいただいた申し入れ書と同じでありましたことは確認しました。これが一体、交流協会が目的としておる文化・経済・事実交流のどこに当たるんですか？」

藪中
「この、今の申し入れは、我が国政府の考え方を台湾の各方面に伝達するということで、そういう意味での行動を行ったわけでございます。」

大江
「そしたら局長ねぇ、あなた方が 1972 年 9 月 29 日に、当時の田中角栄首相が中国と取り交わした日中共同声明、それから 6 年後に園田大臣でしたかね、締結をされた平和友好条約、これは今も有効ですか？」

藪中
「有効でございます。」

大江
「その中に、いわゆる日本国政府および中華人民共和国政府は、主権および領土保全の相互尊重・相互不可侵・内政に関する相互不干渉、こんなことはしないという風にお互い取り決めをしているんですね。交流協会の内田さんがされたことというのは、この項目の違反に当たらないんですか？」

藪中
「今回の申し入れは、まさにこの地域の平和と安定についての日本側の考え方を伝えるということでございまして、そういう意味で、違反には当たらないと考えております。」

大江
「違反に当たらないって、それだけ政治的な関与をしておってですねぇ、しかも！これは正に内政干渉であります。

しかもですよ！この内田さんというのは、申し訳ないですけれども、いわゆる財団法人の一所長です。普通は、　―　私も邱秘書長にお会いしましたけれども、　―　本当に苦渋に満ちた顔をしておった。だけど日本との信頼関係を損ねたらいかんからということで、

内田さんが来たからわざわざ総統府でお会いをした。これ、（例えば）一民間の財団法人の大阪の支店長がですね、官房長官に"会ってくれ"と言って官邸に行ったら、官房長官は会いますか？絶対会わないですよ！

あなた方は、そういう大変失礼なことをしている！！（委員席から一斉に"そうだ！"の声）

だから、あなた方は"一つの中国"の立場に立っている。私も中国というのはけしからんと思う一人ですよ。だけど、今、国際情勢が、国連も（一つの中国というものを）認めている中でですね、しかし、台湾は 3 回も（直接）総統選挙をするんです。1996 年・2000 年、そして今年の 2004 年。

今、全人代が開催されておりますけれども、いわゆるあなた方が非常に誇りにしておるのか、大切にしておるのか、大陸中国。これ、数千年の歴史の中で、人民の中からリーダーが選ばれたという歴史の事実は無いんですよ！

ちょっと質問変えますけれども、川口大臣、いわゆる"民主主義"の一番のわかりやすい原点は何ですか？ちょっとこれ、聞かせて下さい。」

川口順子外務大臣（以下、川口と略す）
「あの～、民主主義というのは何かということで、これは一度に申し上げるのは難しいのですが、私の頭の中の整理では、"民主主義"というのは、人々の意見が反映される民主的な統治を持っている国もしくはそういう考え方・システムであるというふうに考えております。

それから、先ほど一言、先生が冒頭におっしゃられましたので、私のほうから一言申し上げたいと思いますけれども、私も先生のファンでございまして（どよめき）。何故かといいますと、私は小学校時代は和歌山県におりまして、非常に懐かしく思っているということでございますが。あの～、"考え方の違いは考え方の違い"として申し上げさせていただきます。」

大江
「大臣。そういうのを日本では"出鼻を挫く"と言うのであります（笑）。それはそれとして、別な部分に置いておきまして、あの～、何を言うのか忘れたじゃないですか、大臣（笑）。（大臣のペースにはまるな！頑張れ！と野次が飛ぶ）

もー、どこまで言ったのか忘れましたけれども。

いわゆる、民主主義の一番わかりやすいという（例）は、国民や住民に政治家や為政者が選ばれるということではないですか。これは民主主義の一番わかりやすい姿だと思うんです。

最近、藪中局長も拉致問題で色々ご苦労でございます。しかし、北朝鮮へ行かれてですね、あそこは正式名が"朝鮮民主主義人民共和国"。なんか民主主義という名前がついているから、どうもあの国も民主主義の国かなぁと勘違いされているかも分かりませんけれども、そうではなくて、私は台湾というのは、　―　日本も 50 年、統治をしてきました。だけど、あれだけ親日的な国はアジアに無いですよ（再び後ろから！そうだ！"と一斉に声があがる)、―　そういうことをお互いが悲しいけれども、1972 年にですね、いわゆる大陸中国が唯一の認められる政府だということになって以来、　―　我々も、先に大変残念ですけれども、亡くなられた山中貞則先生も、先輩先生方も色々と信頼関係、お互いの信義を今日までずっと守ってきたわけですね、　―　そんな中で、ずっと民主主義のいわゆる階梯として、段階として、やっぱり今、台湾というのはどんどんどんどん、世界に何とか認めてもらおうとして努力しておる、そんな中で日本がですね！（声を大にして）中国にこんなような"内政干渉"するなということを、あなた方言いますか？よう言わんでしょー？！なんで小さな国、弱い国に対してそんなキツいことを・・・。私は、本当に日本というのは"イヤな国になったな～"と思います。こういう間違ったことをしたと、本当に思いませんか？」

川口
「私も台湾は今まで、民主的な方法で 2 度、選挙をやっている。"そういう制度が定着している国であるというふうに思います"。それから、経済的な関係を見ましても、わが国との間では貿易量にしても、人の往来にしても、大変に密接な相互依存的な関係が出来上がっている。"わが国にとっても重要な国"であるというふうに思っております"。

そして、そのことと、我が国としてこの地域の平和と安全（つまり）台湾海峡およびこの地域の平和と安全が、我が国にとっても非常に重要な意味合いを持っているということとは、独立して考えている話であると思っています。

あるいは、わが国との台湾との関係が、"切っても切れない関係になっている"からこそ、なおのこと、そういったことに我が国としては注意を払わざるを得ないというふうに申し上げてもいいかもしれません。

それで、先ほど藪中局長からお話したようなことを、台湾に対して、お話（申し入れのこと）しているわけでございますけれども、わが方は、中国に対しても同じような申し入れ

を致しております。

それで、中国に対しましては何回か言っておりますけれども、一つ例を挙げれば、昨年の12月22日に日中外交当局間の協議において、田中外務審議官から王毅外交部副部長に対しまして、"台湾に対するわが国の立場は日中共同声明にあるとおり、"二つの中国"あるいは"一つの中国、一つの台湾"の立場はとらない。台湾独立は支持しない"、ということであるけれども、これについて、"中国と台湾の間が平和的に解決されること、そのための対話が早期に再開されることを希望していて、中国の武力行使には反対である"、ということをはっきり言っているわけです。同じようなことを、2月10日に行われた日中安保対話においても申し入れています。

従いまして、台湾海峡、地域の平和と安全という観点から、台湾に対しても全く同様に中国に対しても伝えているということでありまして、中国に対しては武力行使をするということはしてはならないことであるという所まではっきり言っているわけでございます。」

大江
「あの～、"同じようなことを言っている"と言いますけれども、私は決してそうではないと思います。それだけに、今回の申し入れ書というのは、書いたのは、（書くように）指示したのは、堀之内さんって（いう人間が）外務省にいてるんですか？」

藪中
「堀之内（秀久）というのは、中国課長でございます。」

大江
「この堀之内さんというのは、瀋陽事件の時に、北朝鮮から亡命を求めてきた家族が、あの映像に出ましたけれども、その家族が持っていた英語で書いてある文書を握り潰して、それで後で官邸に呼ばれて訓告か何かを受けたという、その堀之内さんですか？」

藪中
「あの～、その当時の課長で、現在も課長であります。」

大江
「名前は一緒であり、同じ人物であるということですが、私が今指摘をしたようなことを過去にされた方ですね？」

川口

「まぁ、あの当時のことについての私の記憶では、おっしゃった（ように）、武装警察によって正門脇の詰め所に連れ込まれた脱北者が（領事館員に）手紙を渡した。その手紙を見て、英語で書いてあって良く分からなかったので返したということがありましたけれども、それは瀋陽総領事館の担当の者でございまして、その場でその者の判断で行ったということでございまして、本省の指示によってやったというわけではございません。」

大江
「私がなぜこういうことを聞くかと申しますと、あぁ、さもあらんと思うのは、いわゆるこの問題が、日本がここまで中国の意を受けて、申し入れ書をわざわざ駐在の一所長が官邸まで乗り込んでいって渡すという一連の経過があるわけですね。

2003 年の 12 月 9 日に中国の温家宝首相がアメリカのブッシュ大統領と会った。その時にアメリカ大統領は、この公民投票、日本の新聞はどうも"住民投票、住民投票"としかよう書かんのですが、あれは国民投票であります。この国民投票に非常に懸念をした。そして現状を変えるということには我々も支持しないということをブッシュ大統領が言われた。

しかし、台湾はなにも現状を変えるというようなことを決してしていないわけですね。その中で、アメリカはこうも言っておるんです。

もし中国が台湾に侵攻して武力行使をするようなことがあるならば、大臣のお得意である英語、"We will be there.　"ちょっと発音が悪いですが、"俺たちはそこへ行って守る、そこへ行って戦うんだ"という意思表示を、ブッシュさんは同時にされておる。それだけにバランス感覚のとれたアメリカは、やっぱり国内法の台湾関係法というのがありますから、中国、中国と言ったって、やっぱりバランスをとると、民主主義国家・台湾を非常に今まで大事にしてきて、今も大事にしておる。

そういう中で 12 月 23 日に、"あの"、敢えて"あの"と付けます。"あの田中さん"（田中均外務審議官のこと）が中国へ行って、李さんという中国部長、向こうの大臣ですね、会って"日本は一つの中国を堅持しますよ。今、台湾がやっていることは怪しからんことですよ"ということをわざわざ中国に言いに行っている。その中で、いわゆる 12 月 29 日に内田さんがノコノコと出掛けていって失礼なことをするような経過になっている。その一連の色んな申し入れの文書を含めて、書かれたというのは堀之内さんであるということを、我々が調べた結果、そういう事実を確認しておるんですけれども。

ただ、この交流協会も非常にバランスがとれておるなと思いましたのは、（今年の）1 月 5 日に台湾の実質の大使館である、台北文化経済弁事處（筆記者注：台北駐日経済文化代表

處の誤り）で新年会があったときに、高橋（雅二）さんという理事長が、"国民投票は台湾国民の決定事項であり、日本は介入するつもりはない"と、これは言い訳かどうかわかりませんけれども、こういうことを申し上げておる。だから、同じ交流協会の中でも、こうも意見が違うような対応がなされているということをどう思います？」

川口
「交流協会の中に意見の相違があったかについては、今、藪中局長の方から答えてもらいますが、その前に一言だけ。先ほど、先生がおっしゃた事実関係、調べられた結果というのは私どもの承知している、あるいは、行ったこととは若干違うようなふうに思っております、ということを一言だけ申し上げさせていただきたいと思います。」

藪中
「本年 1 月 5 日に行われました、台北駐日経済文化代表處におけます新年会。この際の交流協会理事長の発言でございますけれども、高橋理事長は台湾記者の質問に答えて、"我々は地域の平和と安定の観点から、台湾の目下の状況を心配しており、先般の申し入れはそれを伝えた次第である"というふうに述べたと承知しております。そういう意味で、基本的に意見の乖離というのは無いと考えております。」

大江
「こういうことになるから、私は今日、高橋理事長を呼んでくれと言ったんですけれども、今日はそういうようなことにはならなかったと。だから、また事実確認をいたしますけれども、もう時間がありません。

大臣、本当に今後、このようなことが起こっても、また繰り返すんですか？

局長は決して政治介入ではないと言いますけれども、私は（思うに）、まさに"内政干渉であり、政治干渉であり、しかも今、選挙をやっている（最中なのだから）選挙妨害ですよ"。

こういうことをね、中国は中国でいいんです。だけどやっぱり日本として、こういうような本当にどこから見ても、どうもルールを逸脱しておる。日本がいつからこんなことをするようになったのか、本当に残念なんです。今回のことに関して、台湾の総統府に対して、申し訳なかったという気はありませんか？」

川口
「あの～、まぁ（大江）委員のお立場が、私どもの（立場）と異なるということについては、良く理解をしておりますけれども、先般来、申し上げておりますように、まさに平和・

安全、この地域および台湾海峡の平和と安全が我が国にとって、非常に重要であるという観点からこういうことを言っているということで、台湾だけに言ったわけではなく、台湾および中国にも言っているということでございます。

今後、わが国としては、台湾については、引き続きわが国にとって重要な地域であるというふうに考えておりますし、台湾と中国の関係については、早く対話を再開して、早く物事の解決をしていって欲しいという立場は変わらないわけでございまして、そういった立場、そして台湾と我が国との関係というのは日中共同声明に則って非政府間の実務的な関係であるということについても、そういう立場を維持しているわけでございまして、そういった基本的な考え方に則って適切に対応してまいりたいと思っております。」

大江
「あのぉ、どうも日本政府は自らが犯した"大きな非"というのを認めてくれないようでございまして、大変残念であります！

時間がありませんので次の機会に譲りますけれども、もう一度よく"こんなことでいいのか？"ということを川口大臣、和歌山へいらっしゃってですね、私が静かな場所を提供しますから、よーく考えていただきたいなと思います。私は、大臣、"きっと本意でやられているのではないんじゃないか"、ということを敢えて申し上げておきます。」

以下、大江議員は中国船舶と EEZ（排他的経済水域）の関連質問に移ったが、おおよそ 30 分の台湾関連質問であった。

なお、答弁において、川口順子外務大臣が台湾を"国"と発言したことで、産経新聞朝刊（3 月 12 日付）に関連記事が掲載されているので以下に転載する。

【外相うっかり台湾を「国」】
川口順子外相は 11 日午後の参院予算委員会で、台湾について「民主的方法で選挙をやり（民主主義）制度が定着した国。経済的関係でも、わが国にとって重要な国」と、2 度に渡って「国」と口を滑らせた。
政府は昭和 47 年の日中共同声明で、中国を「唯一の合法政府」と認め、台湾を領土の一部とする中国の「一つの中国」の立場を尊重している。このため台湾を「地域」などと呼ぶのが通例。日ごろ「官僚答弁」に定評がある外相が、うっかりミスをした格好だ。外相は「『二つの中国』『一つの中国、一つの台湾』という立場は取らない」と政府の立場に変

わりがないことは明確に強調していた。（5 ページ・総合面より転載）